

派遣軍將兵に告ぐ

本冊は聖戦の真義に関し準拠を与えるものなり

昭和十五年（1940年）四月二十九日

支那派遣軍総司令部

総参謀長 板垣征四郎

現代語訳版

英語版：http://www.sdh-fact.com/CL02_1/70_S4.pdf

発行：「史実を世界に発信する会」

<解説>

日中戦争（日支事変）

日本は何故、何を目的に、どう戦おうとしていたのか

日中戦争は、中国が起した戦争であり、日本は望まない戦争に引きずり込まれたものであることを「日中戦争は中国が起こした」（茂木弘道）において説明した。 http://www.sdh-fact.com/CL02_1/69_S4.pdf

日本は、戦争期間中一片の領土要求をしたこともないし、権益要求もしていない。船津和平工作（1937年8月）、トラウトマン和平工作（11月）などにこうした要求が含まれていないことを見れば明らかである。

近衛首相は1938年1月、トラウトマン和平案に対して中国政府が期限が来ても回答を寄こさないのを見て、「蒋介石政府を相手とせず」声明を出して和平断念をしたが、その後何度も和平呼び掛けを行っている。その年の11月、第2次近衛声明で、日満支3国提携による国際正義・共同防共・経済提携の呼び掛けを行った。更に、12月には第3次近衛声明を出した。「善隣友好・共同防共・経済提携」の呼び掛けである。これらに中国支配・侵略の意図は皆無である。

では日本軍は、何を目的にどのような方針、精神で戦っていたのか。これを示す格好な資料が1940年4月29日付で、支那派遣軍総司令部、総参謀長板垣征四郎の名前で配布された「派遣軍将兵に告ぐ」と題する本小冊子である。

ここには、交戦の対象は中国国民ではなく、米英仏ソと結ぶ蒋介石政権であり、その迷妄を打破して、道義に基づく日満支協力関係を樹立することが戦いの目的であることが強調されている。東亜の再建、東亜新秩序建設が根本目的であることが明らかにされている。また、敬、信、愛を以て両民族の結合を図らなければならない、中国の伝統と習俗を尊重せよと呼び掛けている。ここには、中国蔑視の思想はないことも確認される。

戦いが長引いたために、ともすれば、いったい何の目的で戦っていたのかと批判する向きも多いが、決して無目的、惰性で戦っていたのではないことがこの文書からもうかがわれる。

「日中戦争は中国が起こした」は、主として開戦の事情を分析したものであるが、「派遣軍将兵に告ぐ」は、その後の戦いで日本軍が、決して中国征服を目的としていたのではないことを明らかにするものである。後者は、前者を補足して、日本の対中国侵略論批判を敷衍したものとなる。合わせてお読みいただければ幸いである。

*日本語原文は、荘重な漢文調で現代人には少々読みにくいので、現代語訳をしたのが、本冊子である。（原文コピーをご希望の方には差し上げます）

目次

一、事変発生の本原因

- (1) 東洋に対する自覚の欠如
- (2) 欧米諸国の侵略的策動

二、交戦の対象は何か

- (1) 抗日政権の迷妄打破
- (2) 欧米諸国の対日敵性の本質

三、大御心を拝察せよ

- (1) 事変発生当時の御勅語と本庄将軍満州より帰国の際の御下問
- (2) 八紘一宇の真義と東洋道義の再建

四、事変は如何に解決すべきか

- (1) 事変解決の根本観念
- (2) 日本は支那の統一強化を望むか、細分弱体化を望むか
- (3) 満州建国の根本精神を想起せよ
- (4) 東亜新秩序と東亜連盟の結成

五、派遣軍将兵は如何に行動すべきか

- (1) 真個の日本人たれ
- (2) 皇軍たるの本質に徹し身を以て道義を実践せよ
- (3) 敬、信、愛を以て両民族を永久に結合せよ
- (4) 英霊を冒瀆すべき不良邦人を正しく戒め善の道に進ませよ
- (5) 支那人の伝統と習俗を尊重せよ
- (6) 正当なる第三国人に対しては寛容であれ

六、交代帰還将兵に告ぐ

一、事変発生の根本原因

(1) 東洋に対する自覚の欠如

世界に先行する道義文化の伝統を共有し二千年来の友好関係を継続してきた日本・支那の両民族が、近年においてとにかく非友好的な対立抗争状態を現出した根本の原因は、主として東洋人である自覚をともに忘却し個人主義的な欧米物質文化に目がくらみ惑ったことにある。すなわち近年の支那の為政者が事あるたびに欧米諸国に依存し、その力を利用して我が国の発展を阻止しようとしたことから内輪喧嘩の発端を作り、自分から諸国の植民地の地位に沈み込んでしまったことが1つ。また一方で日清戦争に勝った我が国民が戦勝国の地位に立って支那に進出すると支那人を軽んじ侮り、欧米人に対しては先進民族としておもねりへつらい、屈するべきではない膝を屈する者まで出ているように、国家を先導する大理想を忘れて支那を侮り欧米を崇拜する悪弊に陥ったことがもう1つ。これらが、期せずして今日の事態に至ってしまった理由なのである。したがって両国民がともに東洋への自覚を持って日支関係の根本的な是正を図ることが今回の事変の目的である。

思うに、科学的文化の上では遺憾ながら後進国であった我が国が近代国家への躍進の過程として以上のような経過をたどったことは真にやむを得ないことであったとはいえ、反面でまことになげかわしいことでもあった。

だがそれ以来、我が日本の国力の飛躍には著しいものがある。明治維新の当時にはただただ自国の主権を保持しきるだけの實力しか持たなかったものが、日露戦争においては独力でよくロシアの極東侵略を挫折させ、満州事変においては正義の立場に立って動じることなく敢然として国際連盟を脱退した。さらに今回の事変において、東亜再建の理想の下に新秩序建設の大旗を掲げて決起することになったのは、ひとえに天皇陛下の御威光の下、忠義あらたかな先輩たちの業績の積み重ねによる国力の充実にもとなう国民的自覚にもとづくものである。すなわち、我らは今やまさに東洋民族の先覚として、東洋への自覚・東亜の再建という歴史的な大転機に直面しているのである。

(2) 欧米諸国の侵略的策動

イギリスが東洋への侵略を開始したのは、今をさかのぼる約二百年前のインド制圧に端を發している。人口三億五千万のインドをその植民地としてなお飽きたらず、さらに支那に歩を進めて百年前のアヘン戦争によって香港を奪取し、上海・天津の租界を獲得し、揚子江の流域を次々に制してきたのである。だが我が国の決起と支那民族の覚醒によってその露骨な侵略方式を変更し、支那を援助して

その統一にある程度の助力を与え、その代償として財政・金融上の実権を掌握することで政治・経済面でほとんど独占的な地位を占めている。そのイギリスが我が国の進出・発展に対して対立の姿勢を示し、支那に抗日政策をとらせたことが今回の事変を招く結果となったのである。

アヘン戦争の本質は、インド人の作ったアヘンを安く買い上げて支那人に高く売りつけ、その利益はイギリス本国の商人が独占し、そうした結果として支那人を廃人化してきたというものである。だから新しい支那の自覚した青年により起こされた辛亥革命の進展にともない、列強に搾取される植民地的地位から脱却しようとした排外運動の第一目標がイギリスに向けられたのは当然のことであったが、それ以来イギリスはその高圧的な政策を巧みに偽装転換し、支那の民族運動を援助しその鋒先を排日に転向させて日本の進出を阻止しようとした。これが今回の事変につながったのである。

一方、ソ連は帝政ロシアの崩壊と満州事変の結果とにより、支那、特に満州に植え付けていた既得権益を喪失したため、外モンゴルおよび新疆省方面からの支那への侵略と東洋の共産化を企図した。そしてその第一の着手としてガロンとボロディンを派遣し辛亥革命の陣営に参加させて巧みに中国共産党の勢力拡張を図り、支那の民族運動に便乗して極東の強国である日本の大陸進出を妨害しようとしたのである。

イギリスが主として浙江財閥を基礎とする国民党内に勢力を占めることでその既得権益を守ろうとしているのに対抗し、ソ連は中国共産党を操縦し主に農民層にその新興勢力を植え付けようとしていることは明瞭な事実である。したがって国共両党は、背後の力が異なりその本質が異なるのであるから対立抗争するのは当然のようだが、抗日という共通の目標のため、犬と猿が同行するかのように国共合作をおこなって今回の事変に相対したのである。

最近、重慶の内部や山西・河北両省などにおいて国共の衝突が伝えられているのは、ヨーロッパの情勢の反映とも見られるのであり、英・ソ両国の関係が対立状態にある現状から見れば当然の傾向である。

盧溝橋事件の直後の我が国は、終始不拡大方針を堅持してきたのであった。だが欧米やソ連の示唆・煽動を受けた抗日政権は自己の犠牲に盲目となり、我が国との間で事態を收拾しようとする反省の余裕もなく、ついに今日のような未曾有の大戦状態に進展したのである。

最近イギリスが日本に妥協的態度を示してきたことは、彼らの支那での既得権益の大半が上海を中心として我が国の占領地域内にあるために利害を打算した結果と、ヨーロッパの情勢の切迫による当然の動向である。だがひるがえって中国共産党の根拠地は我が日本の占領地域と離れた支那の西北部にあり、また日本と

支那の抗争による両国の疲弊は支那の共産化の好条件である。それは中国共産党が徹底抗日を声高に叫び、重慶政府を脅迫して抗戦継続の盲動をおこなう理由なのである。

二、交戦の対象は何か

(1) 抗日政権の迷妄打破

現在重慶には英・米・仏・ソなどの大使が集合して何事かを画策している。英・米・仏は何とかして重慶を助けて日本の腰がくじけるのを待とうとし、ソ連は日本と支那の交戦継続により日本の対ソ戦力の消耗と支那の疲弊による共産化の促進とを策しつつあることは、誰にでも判断できるところである。すなわち我が国の交戦の対象は、英・米・仏・ソの煽動に踊らされつつある抗日政権およびその軍や匪賊であって、決して支那の良民ではない。したがってこれら抗日政権およびその交戦力の主体である軍や匪賊はこの事変の目的に鑑みて徹底的に懲らしめ、彼らが反省し考えをあらためるまでは五年でも十年でも戦争を継続しなければならない。だが刀折れ矢尽きて我が軍に降る、あるいは自己の誤りを自覚して帰順してきたものは寛容に受け容れてやるべきである。また罪のない良民は心からなだめて落ち着かせてやり、弱きを助け強暴を挫くという我が伝統の武士道をこの聖戦において遺憾なく発揮することが、派遣軍将兵に課せられた大使命なのである。

(2) 欧米諸国の対日敵性の本質

英・米・仏などの諸国が重慶政府を援助している根本の目的は、前述の他を言えば、日本の援助による支那の独立解放を恐れているからである。つまり彼らは支那ないし東洋を永久に植民地の状態におき、本国人の利益のために東洋を搾取の対象としてその植民地の状態を維持することを念願しているのである。またソ連が企図しているのは抗戦の継続による日本と支那両国の消耗(それに乗じた支那の共産化の促進)であり、これらはともに道義に反し打算に立脚したものである。なお、彼らが日本を危険視する理由としては、自分たちが極東から閉め出され放逐されるという幻影や恐怖感をあげることができる。これは東亜の再建と東亜の閉鎖との錯覚である。支那の独立の完成と日本・支那の善隣的な結合とは、なんら第三国の排除を意味するものではないのだ。彼らの正当かつ善意の協力はむしろ望むところであり、これは万邦協和の本領なのである。

御詔勅により明瞭であるように聖戦の真の意義が東洋の平和であり、道義の顕現であり、抗日に染まった支那の反省を促しその建設に協力するものであるから

こそ、我らは堂々と天地に恥じて萎縮することなく、たとえ反対者がどれだけいようとも信じる道を突き進むという信念の下で邁進しつつあるのだ。打算にもとづいた列国の敵対姿勢は一時の現象であり、我々が正道を進み最後まで変わることがなければ、天下に敵はなくなり必ず道義の光が放たれることであろう。

三、大御心を拝察せよ

(1) 事変発生当時の御勅語と本庄将軍満州より帰国の際の御下問

第七十二帝国議会開院式に天皇陛下から賜った御勅語の中で、「我が帝国と中華民国との提携協力により東亜の安定を確保し、それにより共に栄える成果をあげることは、朕がどんな時も心にかけることを放置しなかったことである。中華民国は大日本帝国の真意を理解せずみだりに事を構えたため、ついに今回の事変が発生してしまった。朕はこれを非常に残念に思う。今や朕の軍人たちはあらゆる困難を排除してその忠勇を発揮しているが、これはともかく第一に中華民国の反省を促しすみやかに東亜の平和を確立しようとする行動にほかならない。」と明示なされたことをお察しすれば、聖戦の信義は厳かに明瞭である。

満州事変が一段落ついたところで内地に帰還した本庄将軍が天皇陛下に拝謁させていただいた際、陛下の第一の御質問は、「三千万の民衆は満州国の成立を喜んでいるか。」という意味の御言葉であり、次に「満州北部の水害対策はできているか。第一線の将兵は元気か。」という意味の御言葉であったと伝えられている。心豊かで厚く御仁徳に限りがないこの御勅語と御言葉をいただきながら、今なお我が国民の中には聖戦の結果として非道義的な権益の収穫を期待している者が存在することは、まことにもってあまりに畏れ多い状況である。

(2) 八紘一宇の真義と東洋道義の再建

「上はすなわち国を授けて下さった天の神の徳にお応えし、下はすなわち皇族の御子孫の正しい道德心を養う心を広める。そうすれば、後世において天地四方をあわせた上で都を開き、八紘(全世界)を統一して宇(一軒の家)のようにすることができるのである」とは神武天皇の御即位の際の大詔である。このように道義を根本として正義にのっとり正道を進み、天下の全てを同胞としてあらゆる国が協和する成果をあげることは、我が日本の建国の大精神である。東亜の再建とは、この大詔をよく心に留めて実行し、この建国精神を東亜において実行することにほかならない。東洋への自覚の立場から、正しい道德心を広めること、つまり東洋道義の再建を根本とするものである。

広く貴賤や貧富や強弱と無関係に慈しんでくださる。こうした天皇陛下の大御

心は太陽の光のようであられるからこそ、その光が内外に広くゆきわたり永遠に照り輝き続けて終わることがない。その光が正しいからこそ強く、正しいからこそ恒久性を持っているのである。

欧米諸国が支那・インド・ラテンアメリカなどに対して進めている資本主義的な侵略や、ソ連が企図している階級闘争による世界革命は、他国または他民族を犠牲として自国民のみの繁栄を図るものであり、天地に恥じることのない大道ではない。したがって恒久的に存続することはできないであろう。現在、世界中が動乱の渦の中に投げ込まれつつある情勢は、こうした非道義的性格を持つ世界政策がもたらした当然の混乱である。我々は八紘一宇の信義に徹して、以上のような混乱から東洋を救うために、まず自ら道義を実践し、その結果としての日本・満州・支那の結合によって東洋永久平和の基礎を確立する。それによって大御心にお応えしなければならないのである。

四、事変は如何に解決すべきか

(1) 事変解決の根本観念

八紘一宇の理想はあらゆる国の協和を建設することであり、東洋の平和はその第一歩である。東洋を救った後には世界を救わなければならない。そうであるから、東亜の再建つまり東亜新秩序の建設のためには、まずその基礎である日本・満州・支那三国の関係を道義的基礎の上に物心両面にわたって調整・結合しなければならない。これが今回の事変の直接の目的であり、日露戦争・満州事変・今回の事変はこの歴史的な努力の過程なのである。つまり今回の事変の本質は、消極的には日・満・支三国の安定の確立に関する努力なのであり、積極的には東亜再建への出発なのである。

日・満・支三国の調整・結合に関しては、すでに国策として善隣友好・共同防共・経済提携の三原則が提唱されている。言い換えれば三国は、道義を互いの一致の根源とし、国防および経済の協力を重石とするものであり、相互に国家と民族の本領と特質を尊重して提携し、相互扶助と親睦の親しい交わりをさかんにし、隣国どうしが互いに戒めあって唯物論をかざす共産化の内部侵略を防ぎ、平等互恵の経済により長所・短所を互いに補いあい、一方にあって他方にないものを融通しあうという成果をあげ、それらにより東洋本来の道義文化を保持・発展させるべきである。そしてこの相互関係は東亜再建の基礎であり、模範でなければならない。

(2) 日本は支那の統一強化を望むか、細分弱体化を望むか

支那が眠れる獅子と呼ばれまだ潜在的実力を怖れられていた時には列国の東洋侵略を遠慮させていたのだが、日清戦争の結果その弱体ぶりを世界に暴露したために欧米諸国の侵略にさらされたことは歴史が明示していることである。

支那の独立を脅威と考えることは東洋の平和を乱すことであり、日本への脅威なのである。従来はややもすれば支那を分裂・弱体化させ操縦してやろうというような考えを持つ者がいないわけではなかったが、この考えは支那を侵略しようとする欧米諸国の模倣であって、断じてこの聖戦の目的ではない。

支那の内部に火のように起こりつつある支那統一の民族的要求の実現に、日本がどのような協力も惜しまない大きな決心を固めた時にこそ、初めて日本と支那の善隣の結合を実現させられるのである。万が一、日本人の側に支那人をだまして不当な利益を得ることを望んだり、あるいは外国のように支那を植民地のように考える者がいたなら、それは道義日本の本質に反するものであり、天に恥じることのない信念を持つことは到底できないのである。この聖戦の真の意義は道義による新秩序の建設であるということは確固とした大方針なのであるから、あらゆる施策、さらに言行一致の誠意により戦いに臨まなければならない。

そして欧米諸国の唯物的で道義の精神を持たない政策による旧秩序(資本主義的な支配、または階級闘争的な共産革命)の精算と是正を目的として起こったこの聖戦の真義を、一切の未練を持たずに、また誇張することもなく現実に示すことこそを我らの念願とし理想としなければ、大御心に沿ってお役に立つことにはならないのである。

(3) 満州建国の根本精神を想起せよ

日清・日露戦争、さらに満州事変による幾万人の尊い犠牲の上で誕生した満州帝国は、民族協和の新原理に立脚する道義国家である。先頃、日本の側から治外法権や付属地の行政権を進んで還付し、満州国の健全な発展と強化に善き隣国としての道理を尽くしたことは、内外の区別なく広く知られていることであろう。それ以後の満州国は非常に勢いよい発展を見せ、最近の世界動乱の渦中の中でも、この国家の三千万の民衆だけは戦禍を受けることもなくその居住地で安心して暮らし各々の仕事に楽しく励んでいる。

もし満州国が以前のように張作霖の軍閥の搾取の下にあったなら、おそらく今頃はソ連の一属領にされて三千万の良民が塗炭の苦しみを味わっていたらうし、ひょっとすると第二の日露戦争が満州の広野で展開されていたかもしれないのである。

(4) 東亞新秩序と東亞連盟の結成

東洋諸国が平穏な桃源郷の甘い夢から醒めた時には、すでに欧米諸国の爪と牙がその心臓部に食い込んでいたのである。

もし支那が百年前に目覚めていたのなら、支那は独力で欧米諸国の侵略を防ぎ、アヘン戦争も日露戦争も、さらには今回の事変も免れることができたであろう。元来、日本と支那の両民族は歴史的には二千年の親しい交わりを持ってきたが、西洋諸国との接触以前には国をあげての全面戦争をおこなった事例などないのだ。日本・満州・支那の三国が個々に分裂・抗争すれば欧米諸国に侵略・搾取の機会を与えてしまうが、三国が真の意味で結合すれば、おそらくは世界のどんな国でも一切手出しできないであろう。つまり日・満・支三国が道義を根幹として結合した上で東亜連盟を結成し、善隣と友好の関係を維持し、東亜を侵略する暴力に対しては共同防衛で対処して互いに頼り互いに助け、互惠の経済により不足するものを相互に補完する。そうして三国の国力の充実・発展を図ることによってのみ、東洋の永久平和の基礎が実現できるのだ。そしてそれにより、ひいては東洋の他の諸民族の自主的で正常な発展も助成することになり、すべての国が幸福を共有する世界平和に貢献できるのである。

東亜新秩序すなわち東亜の再建は、以上のような日・満・支三国の善隣的な結合を中核とし、これを東亜全体に発展させようとするものである。その中で願ってやまないことは、東亜の各国と民族がそれぞれ安住の場所を手に入れ、近隣どうしが親しみあい相互に助け合い協力することで各々が天から与えられた特質を活かして興隆し、それにより東洋の道義文化を再建・発展させることであり、その要点は道義的な基礎の上に各国家と民族の自主独立と国防や経済などの相互協力関係をきちんと定めることなのである。

東亜新秩序における相互の国家間の関係は、究極的には東亜連盟結成への発展が期待されているものである。そして東亜連盟の真の意義は、前述したように道義的な基礎の上に東亜の安定と発展とを確保することで世界平和の再建に貢献しようとするものである。したがって、まず日・満・支三国の結合をその基礎とするが、その三国以外の諸国がこれに加入することはそもそも当然あるべき発展として期待されることであり、また欧米諸国が協同歩調をとり協力しようとするなら、もちろん喜んでその進出を受け容れるものである。

五、派遣軍将兵は如何に行動すべきか

(1) 真個の日本人たれ

日本内地に、今なおまだこの聖戦の真義をつらぬかず、西洋を模倣した侵略思想から權益の面での代償を求める考え方を精算しきれない者がいることは非常に

残念である。陛下の長い御繁栄を願う万歳を遺言として東洋平和の人柱となった十萬の将兵の遺骨の上に築かれるものは、天皇陛下の御政道の幅広い告知であり、東洋の道義の確立であり、その結果としての東洋の平和である。自己の利益を求めない心によってのみ永遠の平和が達成されるのである。力によって獲得した利益・権益は力によって奪回され、正しい道によって得たものは正しい道にそむかない限り失われることはない。

うやうやしく前述させていただいた御勅語の中で「中華民國は大日本帝国の真意を理解せず、」とおっしゃられておられるのを読ませていただいた上で非常に恐れ多いことは、今回の事変以前に我々日本人が真の日本人として陛下の大御心をつつしんでうけたまわり、それを支那人に伝えて支那人の側に大御心を理解させる努力をすべきであったのに、それが不足していたことである。

この事変の解決の根本条件は、一億の日本人がすみやかに欧米的な思想から離れて目覚め、真の日本人に立ち帰って日本の真の姿を確認し、国をあげて国家を正しく進ませる大理想の実現に身体と生命を捧げる決意を固めることであり、それこそを第一とすべきである。東洋を東洋へと立ち帰らせる前に、まず日本人が真の日本人に立ち帰らなければならない。

(2) 皇軍たるの本質に徹し身を以て道義を實踐せよ

我が皇軍の特質は、道義の軍として天皇陛下の正しい道を広く浸透させることをその使命としている点にある。陛下の軍人・陛下の軍隊は、いかなる行動の時であろうとひたすら陛下の大御心をつつしんでうけたまわり、身をもって実践しなければならないのだ。

それを、聖戦を遂行する第一線に立っている派遣軍将兵たちの日々の行いの中に天地に対し恥ずかしいようなことがあったのでは、大御心を冒瀆することになり、逆に支那人の側に永久の恨みを残してしまうことになる。人心が離れるようなことでは聖戦の意義は失われるのだ。掠奪・暴行をおこなったり、支那人から理由のない金品の贈与やもてなしを受けたり、人力車に乗って料金を払わなかったり、あるいは敵勢力の討伐作戦に従事している際に敵意もない民家を焼いたり良民を殺傷したり金銭や物資を奪い取るようなことがあったのでは、たとえどれだけ我が真義を宣伝し人心の安定を図ろうとしても、支那人から信頼されるどころか恨みを買うだけなのである。したがって、たとえ抜群の武勲をあげても、それだけでは聖戦としての戦果を完全にあげることはできない。

十萬の英霊は、地下で我々の行いを見守っているのだ。司令部や本部は率先して自粛し自己を戒め、常に第一線の将兵たちに思いをはせ、第一線の将兵たちは戦死した英霊たちに思いをはせて自分自身をきちんと正しく律することが、生き

残った者たちの当然とるべき道なのである。

長期的な戦勝のもととなる要素は、物事を完遂しようとする意気込みの盛んさにある。この聖戦の目的を貫き通すまでは五年でも十年でも戦わなければならない。戦闘は長きにわたっているがそれでも軍紀の緩みを起こさせないためには、特に上位の階級の者こそが自粛・自戒し率先して模範となる行動をとることがまず求められる重要課題である。

(3) 敬、信、愛を以て両民族を永久に結合せよ

「弱い者だから助ける」という気持ち(愛)は、日本人の伝統的な性格である。もともとの聖戦の出発点は、欧米諸国の策動に利用されて分別もなく動く支那の抗日政権をきちんと懲らしめ、虐げられている支那の良民を救おうとする精神に立つものであったが、戦後に期待される日本と支那両民族の恒久的な結合のためには、さらに一步進んで支那民族の本質を真正面から見据え、その長所を見出して尊重し、心の中で彼らへの信頼を持つおおらかな度量を持つことが必要である。

自分を騙すかもしれないこちらが用心してかかると、相手の側もいつまでもうち解けない気持ちを抱いてしまうというのは、個人の交際であっても国家の関係であっても同様である。相手は四千年の古い歴史と欧米に先駆ける文化を持ち、我が国と二千年の友好関係にあった支那なのである。兵や匪賊の暴行掠奪や自然の災害に苦しめられても誰にも訴えることもできず、また最近では欧米諸国の資本主義的な侵略に搾取されながらも根強く生存しせつせと働いて大地とともに生きている支那人を見て、そのしなやかな強さとその苦痛への忍耐とその素朴さを彼らの美点と認識し、一度や二度は背負い投げを喜んで受けてやるくらいの度量で事を進めれば、両民族の精神的結合に必ず成功するであろう。

日本を信頼せよ、日本人と提携せよとどれだけ叫んでも、支那人自身が心から日本を信頼し日本人を信用するところまで行かなければ一方的なことなのである。

我々は支那人にそうしたことを呼びかける前に、まず自分自身を真の日本人として正しい人間としなければならない。それがまず第一の条件である。

(4) 英霊を冒瀆すべき不良邦人を正しく戒め善の道に進ませよ

軍の後ろにつき同胞の先駆として大陸に進出した日本人の中には、人心の安定を図る活動や看護活動で献身的・犠牲的な働きをして職に殉じた者、また現在そうした活動に従事している者も少なくないのだが、日本人の面汚しとなっている者もまた少なくないのが現状である。法に触れる犯罪行為をした者が多いことはもちろん、法に触れなくても道徳的に非難されるべき行いをしている者もたいへん多いという現状は、非常に残念であるが事実だと認めざるをえない。

上海・南京・天津・北京などの夜の状況を一回りすれば、どういう状況であるかを判断することができるだろう。歓楽街の影には不正がありがちで、支那人をだまし脅迫することで不正な利益をむさぼる者、あるいは敵側に利益となることを知っていながら自分の営利のためにあえてそうした行為をする者、あるいは外国人の手先となって日本側に不利になる行為をあえてする者、活動する外国人に名義貸しをして不当な利益を得る者、あるいは個人の利益だけを狙って全般的な統制・指導を拒否するような姿勢の者が存在する状態では、いつまでたっても聖戦の成果を収めることはできない。いやそれだけでなく日本と支那の両民族を永久的な抗争に導くことになるのだ。派遣軍将兵はまず身をもって自己の行動を慎む模範を示し、こうした不良日本人の反省と自覚を促し、十万の英霊たちを冒瀆するような結果を決して生み出さないという心構えにより日本人の側の状況をきちんと正常化することに努力しなければならない。

十万の英霊たちは、不良日本人たちが私腹を肥やすために日本と支那の両民族を再び抗争に導くような結果を見たら、地下で何と叫ぶことだろう。英霊たちを慰めるためには、単に礼拝や花をお供えするだけでは足りはしない。彼らの遺骨の上に築かれるべき日本・支那の永久的な結合を実現させるため全力を尽くすことこそが生き残った将兵一同の義務であり、また英霊たちに対する最善の供養なのである。

(5) 支那人の伝統と習俗を尊重せよ

支那には支那の伝統があり、支那人には支那人特有の風習・風俗がある。これを尊重し、またこれを理解して支那の側の面子を尊重することは絶対不可欠の大事な条件である。日本人は真の日本人であるべきだが、それとともに支那人が真の支那人であるべきことを尊重しなければならない。友好には寛容と同情の心が必要である。

日本の規範を支那に強制したり、日本人が支那の内政に干渉したり、日支合作を唱えながら支那人を傀儡として見下したり、また彼らの風習・風俗を無視していたのでは、どのような新しい考えやすぐれた方策であろうと実績をあげることはできない。すべからく支那自体のことは支那人に任せ、心の中で彼らを信頼するおおらかな度量を持って接しなければならないのである。

(6) 正当なる第三人に対しては寛容であれ

誤った見解を打破し正しい見解を打ち出す、これは皇軍の使命である。天皇陛下の正しい道を広く浸透させるためには国をあげて決起すべきというのは我が日本の国民的信念であるが、同時に無力な弱者を庇護してやることも我が武士道の

本質である。もはや現在、我々の占領地域内に関する限り、我が大軍が駐屯している前では第三国の権益などは無力で無抵抗の存在である。ならば、この中で遠く故郷の国を離れて生存している第三国人に対しては、彼らが道理をふまえており利敵行為をしないかぎり、支那の良民に対するのと同様に寛容な姿勢で彼らを扱い、不必要な心配や不安を取り除いてやるべきである。東亜の再建は全ての国の協和につながる途上の段階であるから、道理もなく利敵行為をする者は排除しても、道理をふまえ中立の立場にいる者は排斥するべきではない。戦時であるため占領下の彼らに我々からは何かと要求があるが、それをとらえて平時に戻ってもずっとそのままなのではないかと思う彼らの不安に対しては、我々の要求の限度を詳しく分析して結果を明示し、彼らが我々の公明な真意を理解し認めることができるように教え導くべきである。過去に過ちがあったからといって現在にまで咎めたり、その本国が非道であるからといって罪もない個人に報復することは、皇軍の将兵がやるべきことではない。ただし彼らの本国がこの聖戦の真意をねじ曲げて解釈し、そのため彼らの中に東亜の混乱を企図する者が出た場合は、その誤った見解を打ち破り一刀両断とする施策を国家の決意の下で堂々と実行するものである。

六、交代帰還将兵に告ぐ

聖戦が長期化してきたことにつれて、交代し内地に帰還する将兵の言動が日本の国内にどれほど強い影響を与えるものであるかを深く詳細に振り返ってみる必要がある。

戦場に出向き戦って三年、あらゆる困難や苦勞に耐え銃弾の雨をくぐって得られた将兵の精神的な収穫は、帰国とともに消滅して物質的なものを万能とする世相に巻き込まれるようなことがあってはならない。戦争に出て来なかった者が楽をして金を蓄えたり高い地位にありついているなどの現実を持ち出し、それを帰還将兵に呼びかけることで国体の破壊を狙う左翼運動が密かに進められていることも警戒すべきである。戦友を失い部下に戦死され上官を亡くした者が考えなければならないことは、地下の英霊たちが何を望み何を期待しているか、その一点である。彼らは皇国日本の姿を世界に対しますます明瞭に高く示し、陛下の長い御繁栄を願う万歳を遺言として遺骨となったのである。もし、この英霊たちを冒瀆するような国内の醜い状況や国民の無自覚があるならば、決意を定めて立ち上がり、皇室の御運を助けさせていただくため、聖戦の目的の貫徹に向かって国内を正しく導く覚悟を持たなければならないことは言うまでもない。自己の生命を銃弾の雨の危険にさらし、何度も死線を越えることで獲得した精神的な収穫は、

たとえどのような物質でも代用することのできない恩恵である。帰還後も物質的なものを万能とする世相に負けたりせず、皇国の国民の精神的中核となって郷里の人々を指導することは、英霊たちに対して生き残った者が持つ義務である。

ヨーロッパは昨年の秋以来、第二の大戦の状態となっており、そのため東洋に対する列国の干渉はやや緩和された状況である。だが利害と打算を信条とする欧州各国が、利益にもならない戦争をずっと続けるものと期待してはならない。また、いつ平和の状態(もちろん武装を互いに固めた平和だが)に移行するのも予測できない。この秋に、彼らがヨーロッパで得られなかった利益を東洋に求めたり、また第三国が連携して対日干渉を試みても当然予期しておかねばならない。第二・第三の国難が内外の両方面から神の国日本への試練として加わってくることを予期し、自己の身を投げ出して国難に向かい合う準備を整え、そして大元帥であられる天皇陛下の御信頼にお応えすること。それこそが十万の英霊たちに対する、これ以上ない供養なのである。